

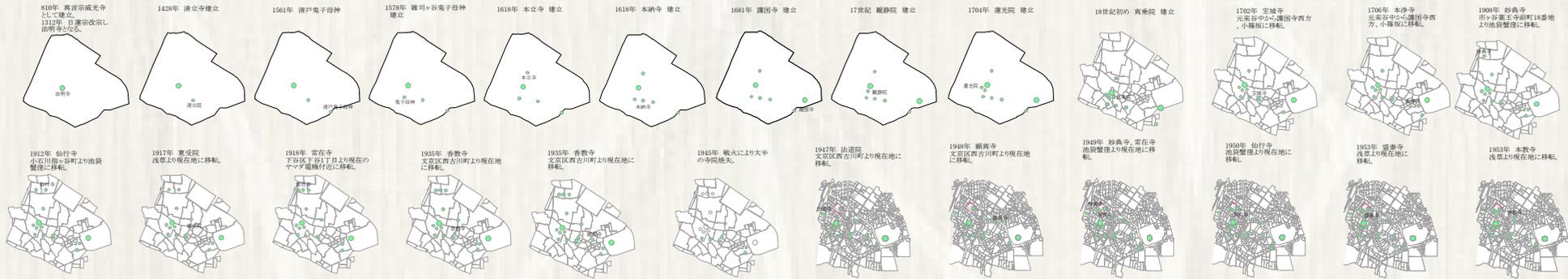
竹林精舎

-寺院・公園再開発-

■計画概要

竹林精舎は池袋駅周辺に位置する実家の寺院とその周辺の4つの寺院群、そして隣接する南池袋公園の再開発の計画である。現在の池袋は再開発が進み、寺院群周辺は様相が大きく変わり始めている。本来、人々が集まる場所であった寺院は、現在ではまちの中で異質な存在となっている。商業地域の印象の強い池袋だが、周辺には寺院が多く、豊島区内にある61の寺院の内、22寺が池袋から隣接する雑司ヶ谷にかけて存在している。池袋周辺が寺町となった起源は雑司ヶ谷の大寺、法明寺の影響で、大多数が日蓮宗の寺院で形成されている。池袋では御会式という日蓮宗の祭りが盛大に行われており、この祭りは江戸時代から続き、池上本門寺と並び称される関東では二大地域となっている。現在においても御会式による結が存在し、寺と共に宗教的なものが地域には根付いている。原初的な寺院である「竹林精舎」という竹林の中に釈迦と修行僧が集い説法を行う仏教空間の始まりの形にならない、ビルが林立する池袋において建てることで象徴性を見いだすのではなく、新たな寺院の象徴として竹林からなる「空」なる空間をつくった。本堂、僧坊、という最低限に必要な建物をつくり、墓を含んだ竹林のランドスケープをつくった。都市における新たな寺院空間を提案する。

■池袋 寺院群成り立ち



■設計経緯



現在の寺院群と公園は木々の緑があるもの、はっきりと断によって境界がつくられている。境内に休憩スペースなどあるもの、活用されることは少ない。公園は地域の人々には危険な場所として認識されている。

境界を消し、寺院群の緑と公園の緑が共存空間を目指す。

寺院と公園の境界を曖昧にし、寺院の境内を提供することで公園と寺院の緑が多くなる。

■ヴォイドにヴォイドをつくる



現在の寺院は2階、見渡せばビルに覆われ、ビル間に置かれている状態にある。このビル群により、池袋の街に対して敷地内の寺院は大きな空隙を生み出している。周囲には現在進行形で建っている高層ビルの建設。空き地さえあればビルが建設されていく。

地面を掘り下げることで、空隙をより空隙にしている。よって、池袋のきょうきょうに繋ぎ詰められたビルの中に余白の空間をつくりだす。

■豊島区の公園緑被率の現状



緑被率とは対象となる地域の面積に対して緑被地が占める割合をいう。樹木や草で被われた土地のことを緑被地という。

◆23区内での豊島区のみどり

23区の中で、豊島区の緑被率は12.9%(平成21年度)と19番目と低い順位になっていて、緑が少なく状態にある。地表面積の91.4%が構造物等で占められた地上部の緑化余地の割合も低くなっている。最も緑被率が高いのは26.1%の練馬区で豊島区は2倍以上の数値となっている。

豊島区は10万㎡を超える大規模な都市公園がなく、小規模な公園を整備し、進めてきたが、人口一人あたりの公園面積、区面積に占める公園面積率では23区中最下位である。公園等188箇所、一人あたりの公園面積0.76㎡となっている。

■池袋に広がっていた丘 根津山



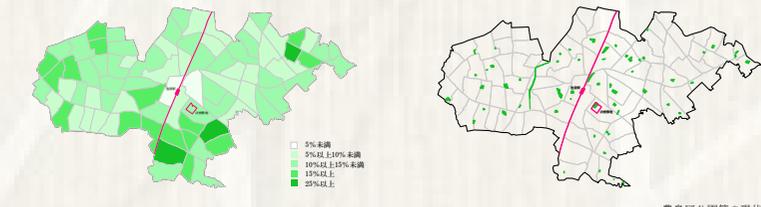
根津山とは

昭和初期まで、南池袋公園周辺は東西500m、南北300mほどに広がる丘があり、現在の池袋駅から護国寺に向かう通りの一帯は当時の地元の人々から「根津山」と呼ばれるほど木々に覆われた森だった。森の中には小さな丘があり、水窪川が東へと流れていた。根津山は戦中戦後を池袋で過ごした人にとって忘れられない場所であった。

根津山は戦時中、所有者の根津嘉一郎(東武鉄道、富国徴兵保険会社経営)により無償開放された。子供の遊び場となり人びとは食糧調達のために耕作するなど自由に使われていた。1937(昭和12)年、9月池袋一護国寺間の新設道路開通で森は分断された。森の南側は道を隔てて本立寺の墓地に面していた。戦後の復興により一帯は売却され、丘は切り崩すし、雑木林は伐採されていった。現在は空地がないほど多くのビル群に囲まれている池袋だが、戦前、池袋周辺は牧場や草原に囲まれた地域であったことがわかる。



森の中に流れていた水窪川 根津山で畑仕事を行う人々 根津山の丘で記念撮影をしていた少女たち



◆豊島区 緑被現状

平成21年に行った緑被現状調査では、区内の緑被面積は167.8haで緑被率は12.90%だった。昭和49年からの推移では平成9年までは緑被率全体が減少していたが、平成16年以降は増加している。主な緑被率は東部の染井園付近、南部の学習院大学と雑司ヶ谷園付近に分布している。また、池袋周辺は緑被の分布が非常に少ないが、一方で住宅を中心に小規模な緑被が多く分布していることがわかる。豊島区では平成32年度までに13.0%の緑被率を目標に新たな緑化の創出に努めている。

◆豊島区 公園緑地

平成22年4月1日時点での公園整備状況は、都市公園が62箇所、約14.2ha、その他の公園が99箇所、約4.6haで合計は161箇所、18.8haです。まちづくりに関する区民意識調査では、みどりづくへの要望が3割と高いものの、身近なものの現状についての評価は低くなっている。

◆公園・緑地の拡大
学校等の跡地を有効的に活用し、目標整備面積を24.5ha(期間内目標整備面積58100㎡、公園面積1.9%)としている。また平成14年度までに公園整備面積を25.4haとする。(期間内整備面積67100㎡)平成32年度までの計画期間内の目標値は一人あたり公園面積0.91㎡/人(想定人口26万9千人)とする。



御会式という「結」

池袋には毎年10月16、17、18日に行われる「御会式」という盛大な祭りがある。「御会式」とは日蓮宗の開祖である日蓮上人の供養を行うための祭りで、この地域では江戸時代から続く伝統行事である。華やかな万灯を掲げ、人々は団扇太鼓を叩きながら題目を唱え池袋から雑司ヶ谷までを練り歩く。

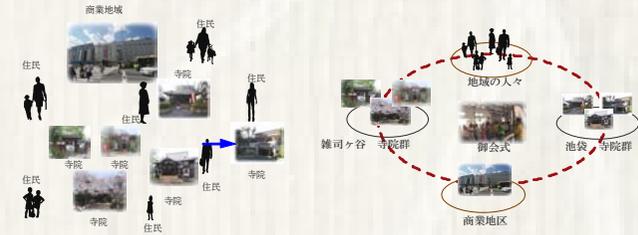
御会式の3日間はいつもの池袋とはまるで違う幻想的な風景を見ることができる。

御会式では池袋・雑司ヶ谷周辺の地域の団体25講が参加し、練供養を行う。

雑司ヶ谷の御会式は関東の中で池上本門寺と並び称される二大地域となっている。

街をあげて行う「御会式」は行事は地域の人々を繋ぎ、寺院と地域を繋ぎ、寺院と寺院を繋いでいく。

■池袋の地域と御会式



池袋駅周辺を大きく分けて池袋駅を中心とした商業地区、周囲を会社や専門学校に囲まれる池袋の寺院群、閑静な住宅街の中にある雑司ヶ谷の寺院群、そして副都心開通と共に再開発が進んでいる再開発地域に分けることができる。

商業地区の印象が行っている商業住宅街から、寺院が多く存在すること、あまり知られていない、外部の人々からすると住民の人々の顔が見えにくく、地域のコミュニティがあることも金かわらないう。しかし、池袋は繁華街から池を一本挟めば住宅街が広がり、現在も町会など昔からの繋がりが強く存在している。

御会式は地域を一体にしていく。雑司ヶ谷と池袋を繋いでいく。寺院、住民、地域を繋ぎ、池袋にはまだ古くした土着のものが地域の伝統行事として強く残っている。老若男女問わず多くの人々が集結し、行う御会式は地域というものを実感し結束を強くしていく。



16日は各々が地域の講の拠点から出発。御会式で地域の繋がりが生まれる。寺院は日蓮宗の寺院で、御会式の手伝いを行う。

16日は個々の日蓮宗の寺院、地域の講がそれぞれの地域の練供養を行う。17日は地域の地元の25講が集結し、清土鬼子母神に出発する。個が集まり群となることで点在していた繋がりが、徐々に広がり、拡大していく。

18日は最も盛大に行われる。池袋駅東口・西武百貨店前から出発。明治通りの鬼子母神参道口を通り、その後千登世橋から目白通りへと入っていく。鬼子母神参道と練り歩き、鬼子母神、法明寺へと参拝する。拡張してきたものが面となって池袋、雑司ヶ谷を包括し一体となる。



Level 1200 平面図 1/300

Level 2500 平面図 1/300

古代インド仏教の寺院の変遷



仏教が開かれた頃はまだ建物の原型はなく、僧園と呼ばれる竹林、マナーの木々の中で説法など行っていた。木々のある所に人々が集まり、自然のそのものの空間が寺院だった。



ブツダキ後、ストゥーパ(仏塔)と呼ばれるブツの意が帯びてられ、仏教儀の礼拝の対象となった。そして仏塔、僧院というお寺の要素の基本形ができる。



仏塔、僧院に加え、祠堂という新たな要素が加わる。僧院は中庭を取り囲むように口の字型の建物が造られ、その広さは二層くらいに区切られていた。主に木造や石造で造られていた。この形の寺院が現存しているのは石窟寺院しかなく、木造の寺院を模した形を洞窟の中で柱、梁などが組み込まれ、忠実に再現されている。



■ 仏教におけるストゥーパ(仏塔)崇拝の起源
ストゥーパとは墳墓のことである。ブツダキ後、火葬された遺骨(舍利)がストゥーパに納められたことから崇拝されるようになった。ブツダキ後、ストゥーパの内部に遺骨の代わりに歯や髪、爪などを納めたもの、または何も納めなくても、ブツダの代わりとして礼拝の対象となっていた。当時のストゥーパ崇拝は、原則的には肉身を滅したブツダの礼拝であり、道徳的な供養であった。しかし、時代と共にストゥーパが聖なる場所として信仰されていった。

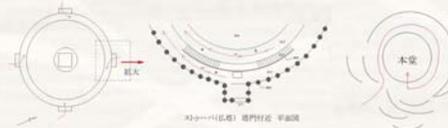
■ 竹林精舎とは

竹林精舎は釈迦が悟りを開いてから、初めて与えられた布教の場である。仏教史上最初の精舎である。(精舎とは「僧の住むところ」の意、現在で言う寺院のこと)寺院の始まりの場所とされ、現在もインドに跡が残されている。当時はまだ建物も建っておらず、鬱蒼と竹林が広がり、池があるだけの簡素だが自然に溢れた土地だったとされる。こうした竹林の中で釈迦と仏教徒は説法を行い、語り合っていたのだ。そこにはただただ広大な自然と仏教の教えだけがある無垢な場所。インドの雨季は数か月も雨が降り続くため、遊行するにはきびしく、生活に制限を受けていた。しだいに釈迦さまと弟子たちは遊行から定住へと移っていき、濡れずに修行や勉強ができるように建てられた楕円小室のような簡素な形態のものが精舎がお寺の起源である。

■ 本堂のフォルム



「万灯(まんどう)」
御会式で縁供養を願に地域の講が必ず掲げているのが万灯である。万灯とはストゥーパ(仏塔)を模したものである。家の造りを模して万灯供養を盛大に行うのは、自業無千などという自業無千がたれればたれればの木の木が千面はすれの花を映かすという故事に由来している。万灯は日蓮宗のストゥーパであり、地域のシンボルである。
・構造
講堂にすることで、外部の竹の影を映し出し、シルエットとして現れる。内部は丸い屋根に揺れる竹や、鳥の姿を映し、内部にて外部の景色を映し、則々と変化する外の様子を体感する。自然が持つフォルムがそのままとしていて、無常の姿が映し出される。ガチナリー面鏡を採用している。



ストゥーパ(仏塔)の礼拝方法 本堂までのアプローチ

古代インドでは聖なるもの(チャイティイ)の周りを時計回りの方向でめぐることが礼拝行為であり、その道筋を繞道(にょうどう)と呼ぶ。現在でもこの伝統的な礼拝の方法が行われている。対象が山であれば、樹木であれば、塔であれば、人は世界の中心のまわりをひたすらにめぐり、それがインド古来の礼拝作法なのだ。

■ ランドスケープとしての墓地



日本では墓地というと暗く陰鬱な印象を受けるが、本来は祖先が安らかに眠る場所である。だから墓地を下れば遊歩道にもなる。本堂を核に放射状に線を描き、墓の配置、遊歩道形成する。お墓をお参りする回転軸上に本堂を感じる。



景の基調は緑の竹と水。天幕は竹の影と水の色。人々の動きが映り込む。

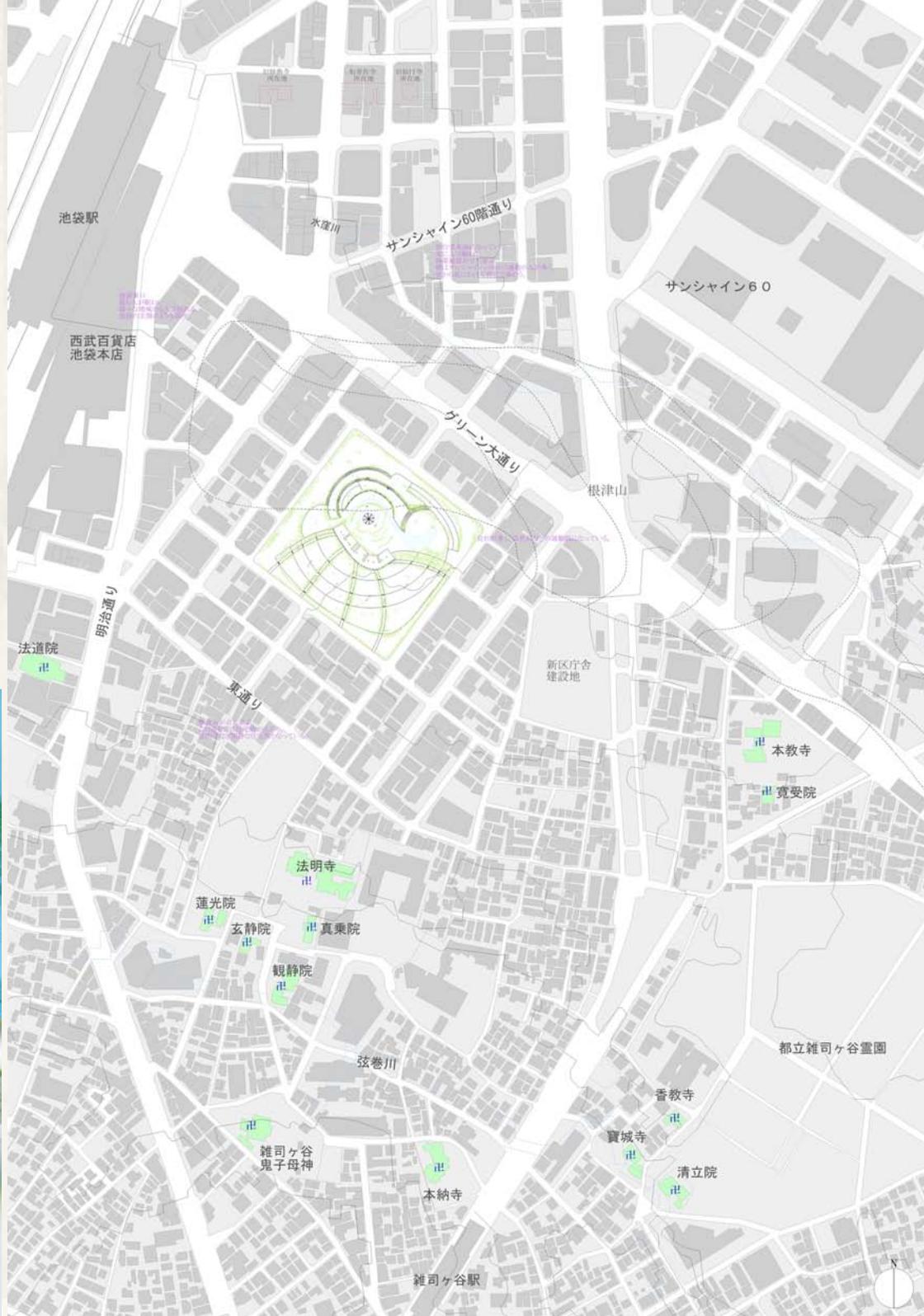
竹に囲まれ、地盤が柔らかい。風が吹くと竹の葉が揺れ、水が揺れる。人々の動きが映り込む。

竹の影が水に映り、水の色が竹の色になる。人々の動きが映り込む。

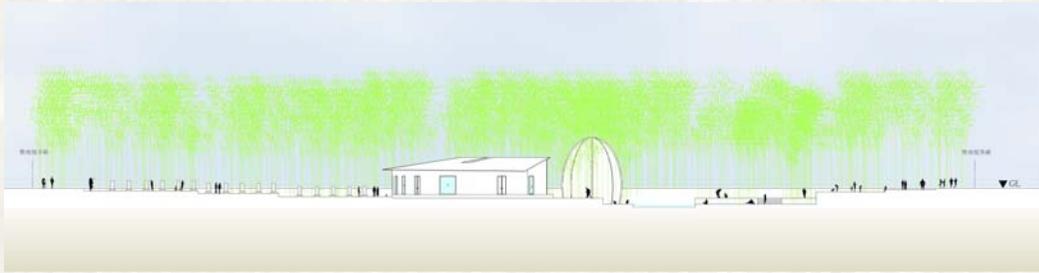


僧坊まで続くアプローチ。竹の影が水に映り、水の色が竹の色になる。人々の動きが映り込む。

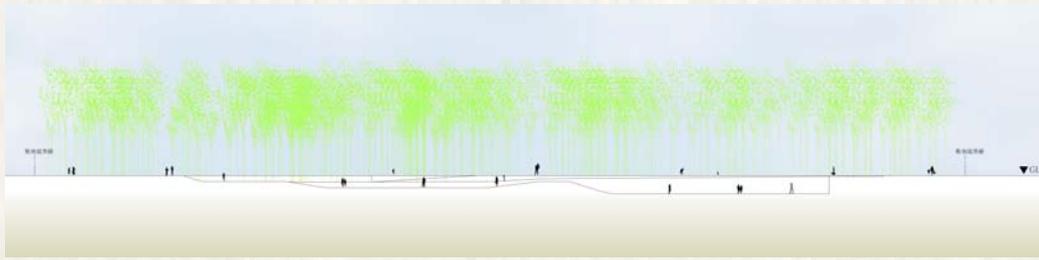
竹の影が水に映り、水の色が竹の色になる。人々の動きが映り込む。



雑司ヶ谷駅 雑司ヶ谷 鬼子母神 本納寺 法明寺 真乗院 観音院 蓮光院 玄静院 香教寺 寶城寺 清立院 本教寺 寛受院 都立雑司ヶ谷公園 根津山 新区庁舎建設地 西武百貨店 池袋本店 池袋駅 水窪川 弦巻川 明治通り 東通り サンシャイン60階通り グリーン大通り



F-F' 立面剖面图



E-E' 立面剖面图



I-I' 立面剖面图



C-C' 立面剖面图

